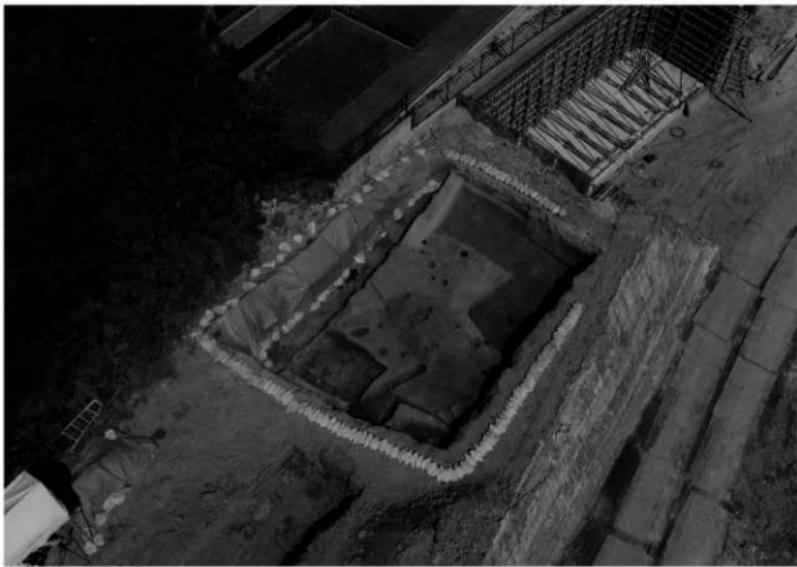


桟敷貝塚

－宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2020

大府市教育委員会
ナカシャクリエイティブ株式会社



完掘写真 南西から



完掘写真 北から



空中写真 俯瞰全体 北東上

例　言

1. 本書は、愛知県大府市朝日町五丁目地内に所在する棧敷貝塚(愛知県遺跡番号440006)の宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、土地造成に伴う緊急発掘調査として、土地所有者である株式会社全農林の委託を受けたナカシャクリエイティブ株式会社が行い、三者協定書に基づき大府市歴史民俗資料館が監督・指導を行った。費用は全額土地所有者が負担した。調査面積は93.2m²である。
3. 調査は、発掘作業を令和元年9月2日から同年10月5日にかけて、整理作業を令和元年10月1日から令和2年3月31日にかけて行った。
4. 調査の体制は以下の通りである。

監　督　員：田中城久(大府市歴史民俗資料館)

　　：高野夏姫(大府市歴史民俗資料館)

調　査　員：後藤太一(ナカシャクリエイティブ株式会社)

測量技術員：大杉規之

発掘作業員：磯村江美子・磯村孝弘・下之段秀忠・下之段久子・鈴木智恵

整理作業員：石原愛・伊藤想斤・大嶋里奈・亀井久美子・見城祥子・齊藤園江

5. 本書の執筆について、第2章第1節は田中城久(大府市歴史民俗資料館)が、その他の執筆と編集は後藤が行った。遺構図作成は大杉が行った。

6. 基準点設置・空中写真撮影は株式会社DB、遺物写真撮影はスタジオタイニイにそれぞれ依頼した。

7. 発掘調査および報告書作成にあたっては、下記の方々と関係機関の御指導・御協力を賜った。記して感謝いたします。(順不同・敬称略)

黒沢浩(南山大学人文学部人類文化学科教授)・平井義敏(みよし市教育委員会)・楠美代子(東浦町教育委員会)・鈴木香織(東浦町教育委員会)・向井康哲土地家屋調査士事務所・hata工業

8. 調査記録類ならびに出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管している。

凡 例

1. 本書では、次に示した地図を調整・使用している。
国土地理院発行 5万分の1地形図「名古屋南部」(H13)、「半田」(H19)、「豊田」(H11)
大府市教育委員会発行「大府市遺跡等分布図」平成26年度版
2. 本書に示す座標数値は、平面直角座標第VII系に準拠し、世界測地系で表記した。海拔標高は東京湾平均海面高度(T.P.)を使用した。
3. 図中の遺構寸法の法量単位およびXY座標はm(メートル)である。
4. 本書に掲載する遺構・遺物図は、以下の縮尺を基本とした。
遺構図：全体平面図 1/80、個別遺構図 1/50、土層断面図 1/50
遺物実測図：1/3、007のみ 1/1
5. 遺構種別の略記号は以下のとおりである。遺構番号は種別ごとに001から付与した。
SB: 竪穴住居 SD: 溝 SK: 土坑 SP: ピット SL: 地床炉
6. 本書で使用する土色・色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』2010年版による。

目 次

例 言	i
凡 例	ii
第1章 調査の概要	
第1節 位置と地形	2
第2節 歴史的環境	2
第2章 経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	8
第2節 調査の経過	11
第3章 遺 構	
第1節 概 要	14
第2節 遺 構	14
第4章 遺 物	
第1節 概 要	28
第2節 遺 物	28
第5章 まとめ	
まとめ	36

挿図目次

図1 大府市・桟敷貝塚遺跡位置図	2	図8 遺構平面図	15
図2 桟敷貝塚詳細位置図	3	図9 壁断面図	16
図3 大府市遺跡分布図	4	図10 SB001平面図	18
図4 確認調査・再確認調査トレンチ配置図	8	図11 SB002平面図	19
図5 桟敷貝塚確認調査土柱図		図12 SD001平面図	20
T - 1 ~ T - 7	9	図13 その他遺構平面図	21
図6 桟敷貝塚確認調査土柱図		図14 遺物実測図	29
T - 8 ~ T - 12	9	図15 遺物実測図	30
図7 桟敷貝塚トレンチ配置図・土柱図			
T - 13	10		

表目次

表1 大府市遺跡一覧	5	表3 遺物観察表	31
表2 遺構観察表	22		

写真目次

写真1 桟敷貝塚調査前 東から	8	写真17 SL001断面 北から	24
写真2 桟敷貝塚確認調査 T - 4 南から	9	写真18 SB001下層断面 東から	24
写真3 調査前写真 東から	11	写真19 SB001完掘 北上	24
写真4 表土掘削 東から	11	写真20 SB002断面 北から 1	25
写真5 遺構検出 東から	12	写真21 SB002断面 北から 2	25
写真6 検出状況 南から	12	写真22 SB002断面 西から 1	25
写真7 遺構掘削 南から	12	写真23 SB002断面 西から 2	25
写真8 測量 南東から	12	写真24 SB002完掘 北上	25
写真9 トレンチ掘削 南から	12	写真25 SP031出土遺物	26
写真10 空撮(ドローン) 北から	12	写真26 SP002出土遺物	26
写真11 空撮 北から	12	写真27 SD001断面 南東から	26
写真12 追加区検出状況 西から	12	写真28 SD001完掘 北西上	26
写真13 完掘 1 北西上	14	写真29 遺物写真	32
写真14 完掘 2 北西上	14	写真30 遺物写真	33
写真15 SB001断面 西から	24	写真31 遺物写真	34
写真16 SB001断面 北から	24		

第1章 調査の概要



第1節 位置と地形（図1・2）

大府市は愛知県西部、知多半島の基部に位置しており、北は名古屋市・豊明市、東は刈谷市、南は知多郡東浦町、西は東海市とそれぞれ隣接している。

市域は主に丘陵地で、東部の尾張丘陵と西部の大府丘陵に分かれている。丘陵地も標高50mを超すものは少なく、東部では標高40～50mの急な斜面が認められ、西部では標高40m程度緩やかな斜面であることが多い。丘陵は常滑層群と呼ばれる地層からなり、礫層・砂層・シルト層から構成されている。東部では礫層が表しており、西部では砂層・シルト層が主に表しているため、東部では透水性が高く地表の浸食に強いが、西部では浸食を受けやすいとされている。丘陵を東西に分けている市内ほぼ中央には鞍流瀬川が流れおり、石ノ瀬川・境川へと合流している。また、大府市東部では標高10～20mの河岸段丘と境川・逢妻川と支流が作り上げた低地がみられる。

桟敷貝塚は大府市の南部にあり、熱田神社の南100mの地点で、市庁舎やJR大府駅などがある中心部から直線距離で南に800～900m、石ヶ瀬川と境川の合流地から1.4km程北西に位置しており、標高は10m程度である。

第2節 歴史的環境（図3、表1）

現在、大府市域において確認されている遺跡の大半が、その丘陵地形を利用した窯跡であり、市内全域に散在している様相が窺える。その他の時代・種別の遺跡として、古いものでは石器が複数採集されている旧石器時代の共栄遺跡、条痕文土器が採集され縄文晩期とされる桟敷貝塚が知られている。また、弥生時代の遺跡として共和町の子安神社遺跡、横根町の惣作遺跡が認められている。共に2度の調査が行われており、子安神社遺跡では弥生時代後期から終末期の土器が、惣作遺跡からは弥生時代中期の土器が出土している。また、この両遺跡は中世までの土器類が出土する複合遺跡としても知られている。その他、源吾遺跡、高山古墳、中世の遺跡とされる石丸遺跡、賢聖院貝塚、近世の遺跡として墨書きされた経石が出土した東光寺経塚・円通寺経塚などが知られている。

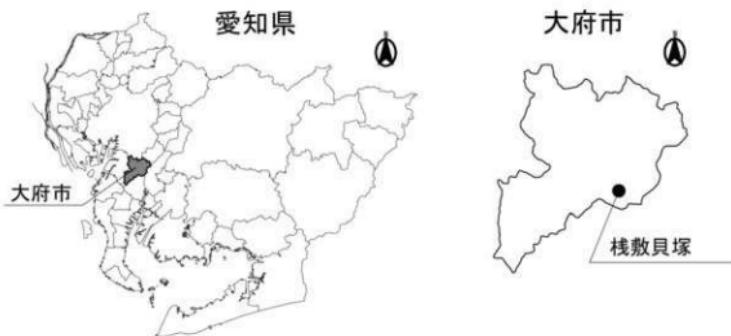


図1 大府市・桟敷貝塚遺跡位置図

古代から現代に至るまで、愛知県は窯業地帯として知られており、特に尾張東部から三河西側に展開する古窯址群である通称「猿投窯」と知多半島における「常滑窯」は日本有数の窯業地として名高い。大府市はこれら2つの古窯址群が接する地域であり、市の東部を流れる境川と、境川の支流で市の中央を流れる鞍流瀬川がそれらの境界の東南部であるとされている。市内で確認されている最古の窯跡は灰釉陶器を生産した高根山C古窯群で北崎町に所在している。12世紀から13世紀にかけて山茶碗の生産が本格化し、市内丘陵部全域に山茶碗窯が分布しておりその数は140ヶ所以上に及ぶ。なかでも吉田第1・2号窯では瓦類が山茶碗と併焼されており、それらの瓦は鳥羽離宮東殿へと供給されている。

その後、窯業を継承していった瀬戸窯・常滑窯と異なり、大府市では平安時代末期から鎌倉時代末期まで続いた窯業活動が、室町時代には急速に衰え、市内域における山茶碗生産は終息を迎える。その後、丘陵地一帯は遺跡が希薄となるが、室町時代末期の戦乱期には市内に吉川城跡・追分城跡・横根城跡が認められ、周辺でも多くの砦や城館が確認でき、中には大高城跡・鷺津砦跡・丸根砦跡といった永禄3年（1560）の桶狭間の戦いでも知られる城砦が隣接している。



図2 桟敷貝塚詳細位置図

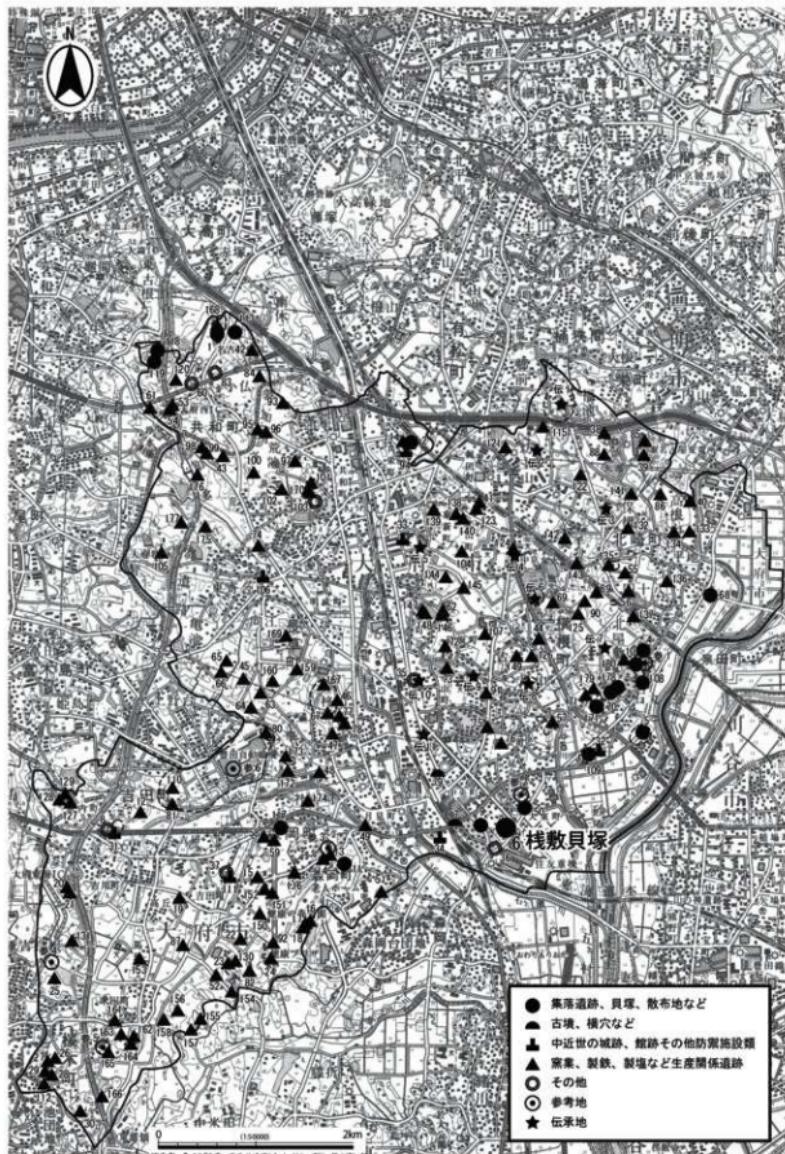


図3 大府市遺跡分布図 国土地理院発行 5万分の1地形図「鳴海」(H.14)

表1 大府市遺跡一覧

番号	遺跡名稱	時代	番号	遺跡名稱	時代	番号	遺跡名稱	時代
1	子安神社遺跡	弥生～中世	80	山口古窯群	不明	160	車場古窯	中世
2	共栄道跡	旧石器・縄文	81	大高山西古窯	不明	161	森東古窯	中世
3	東光寺跡	江戸	82	羅染第3号窯	中世	162	前田A古窯	中世
4	寶聖院貝塚	中世	83	円通寺移築	江戸中期	163	前田B古窯	中世
5	想作遺跡	弥生～鎌倉	84	大廻間古窯	中世	164	前田C古窯	中世
6	棲敷貝塚	縄文晚期	85	みどり公園古窯	中世	165	森前古窯	中世
7	高山古墳	古墳後期	86	高櫻山西古窯	中世	166	骨田池古窯	中世
8	正官壙	中世	87	口無池西古窯	中世	167	深堀間C古窯群	中世
9	南島貝塚	不明	88	北崎大谷古窯	平安	168	子安古窯	古代～中世
10	石丸遺跡	中世	89	其手古窯	中世	169	上田A松古窯	中世
11	瀬音遺跡	古墳	90	箕手B古窯	中世	170	瀬戸C古窯群	中世～中世
12	野々宮古窯	平安中期	91	ガンジ山C古窯群	13世紀	171	中村遺跡	古代～中世
13	森岡第1号窯群	12世紀中	92	柳沢古窯	中世	172	ウドB古窯	古代
14	森岡第2号窯	13世紀	93	上德古窯群	中世	173	ウドD古窯	古代
15	北向古窯	13世紀	94	丸根城跡	不明	174	森岡平古窯	中世
16	旧中部病院第1号窯	12世紀	95	大深田古窯	12世紀	175	鶴見古窯	中世
17	旧中部病院第2号窯	不明	96	荒地古窯群	中世	176	木根C古窯	中世
18	旧中部病院第3号窯	不明	97	妙原古窯	中世	177	西忍辱古窯	中世
19	ハナヤ病院	13世紀	98	木根A古窯群	中世	178	名高遺跡	古代～中世
20	吉田里古窯	12世紀	99	木根B古窯群	中世	179	平子B古窯	中世
21	吉田寺第2号窯	12世紀	100	分久古窯群	中世	180	牛池古窯	中世
22	柳沢古窯	13世紀	101	瀬戸B古窯群	中世			
23	瀬述第1号窯	13世紀	102	瀬谷古窯	中世	参1	城壁城跡群参考地	
24	瀬述第2号窯	不明	103	瀬戸A古窯	中世	参2	延合寺跡群参考地	
25	大田古窯	不明	104	北山古窯	中世	参3	猪伏村城跡群参考地	
26	外輪第1号窯	不明	105	石原古窯群	中世	参4	尾括落古田古窯所	
27	外輪第2号窯	不明	106	長草城跡	中世	参5	米田古窯参考地	
28	外輪第3号窯	不明	107	長稻山古窯	中世	参6	大府飛行場跡	
29	外輪第4号窯	不明	108	番門寺遺跡	中世	伝1	井田地区古窯跡群伝承地	
30	青田末古窯	12世紀	109	寺田遺跡	中世	伝2	鉄工場跡内古窯跡群伝承地	
31	吉川城跡	中世	110	大高山西古窯群	中世	伝3	西定保和地區古窯跡群伝承地	
32	横根城跡	中世	111	鳥清屋敷跡	不明	伝4	至学館大学内古窯跡群伝承地	
33	分分城跡	中世	112	外輪南古窯	中世	伝5	阿部屋敷	
34	石ヶ瀬古戦場跡	中世	113	岩燒遺跡	中世	伝6	ニッカ地区古窯跡群伝承地	
35	大溝井戸跡	中世	114	上り戸古窯	中世	伝7	沢井丹後屋敷	
36	利しも井戸跡	不明	115	井田古窯群	中世	伝8	いきいきタウン内古窯跡群伝承地	
37	齊沢井戸跡	中世	116	池之分古窯	不明	伝9	ガンジ山地区古窯跡群伝承地	
38	福吉古窯	中世	117	山中遺跡	古代～中世	伝10	大清水町伝承地	
39	大根古窯	中世	118	兒子細井A遺跡	古代	伝11	七津大夫屋敷伝承地	
40	高根山西古窯群	中世	119	兒子細井B遺跡	古代			
41	萩田古窯	中世	120	下入遣古窯	中世			
42	別唄古窯群	中世	121	坊生山A古窯群	中世			
43	稚兵衛池古窯	中世	122	井田B古窯	中世			
44	名高山西古窯群	中世	123	楓田B古窯群	中世			
45	立樁A古窯群	中世	124	石丸山西古窯群	中世			
46	深淵堂A古窯群	中世	125	箕手C古窯群	中世			
47	桃山A古窯群	中世	126	古井B古窯	中世			
48	石ヶ瀬古窯	中世	127	長峰北A古窯	中世			
49	江幡古窯	中世	128	長峰北B古窯	中世			
50	延命寺塚	不明	129	長峰北C古窯群	中世			
51	割木A古窯群	中世	130	羅染西古窯	古代			
52	東端古窯	中世	131	井戸場古窯群	中世			
53	才田A古窯	中世	132	西定保根A古窯群	中世			
54	才田日古窯	中世	133	高根山西古窯群	古代～中世			
55	山手A古窯	不明	134	高根山西古窯群	古代			
56	山手日古窯	不明	135	山手C古窯群	中世			
57	羽根山古窯群	中世	136	上り坂古窯	中世			
58	神明古窯群	平安末期	137	山之神北古窯	中世			
59	測陵魔古窯群	中世	138	八代山西古窯	中世			
60	円通寺古墓	近世	139	八代山西古窯	中世			
61	入上遺古窯	中世	140	八代山西古窯	中世			
62	長根山A古窯群	中世	141	西定保根B古窯群	古代～中世			
63	立樁B古窯群	中世	142	箕手D古窯	中世			
64	立樁C古窯群	中世	143	箕手E古窯群	中世			
65	立樁D古窯群	中世	144	上東山A古窯	中世			
66	立樁E古窯	中世	145	上東山B古窯	中世			
67	深淵間B古窯群	中世	146	立合池西A古窯群	中世			
68	西浜田遺跡	不明	147	立合池西B古窯群	中世			
69	二ッ池東古窯	中世	148	立合池西C古窯群	中世			
70	藤井宮跡御瓶子出土地	中世	149	古井戸A古窯	中世			
71	平子古窯	中世	150	脇ノ畑A古窯	中世			
72	鴨池北古窯群	中世	151	脇ノ畑B古窯	中世			
73	鴨池東古窯群	中世	152	脇ノ畑C古窯	中世			
74	下北山西古窯群	中世	153	馬池古窯	中世			
75	川池西古窯	不明	154	東端古窯	中世			
76	石丸古窯	不明	155	毛分田A古窯	中世			
77	桃山B古窯	不明	156	毛分田B古窯	中世			
78	桃山C古窯	中世	157	家下古窯	中世			
79	雨森池西古窯	古墳	158	上家下古窯	中世			
			159	車場A古窯	中世			

参考文献

愛知県大府市	1988	『大府市誌 資料編 自然』	愛知県大府市
愛知県大府市	1991	『大府市誌 資料編 考古』	愛知県大府市
加藤岩蔵	1972	『惣作遺跡』	大府市教育委員会
加藤岩蔵ほか	1984	『子安神社遺跡発掘調査報告書』	大府市教育委員会
愛知県大府市	1997	『円通寺経塚』	大府市教育委員会
西村匡広ほか	2018	『上入道古窯』	株式会社アコード名古屋営業所

愛知県	2002	『愛知県史 資料編1 旧石器・縄文』考古1	愛知県
愛知県	2003	『愛知県史 資料編2 弥生』考古2	愛知県
愛知県	2005	『愛知県史 資料編3 古墳』考古3	愛知県
愛知県	2010	『愛知県史 資料編4 飛鳥～平安』考古4	愛知県
愛知県	2010	『愛知県史 別編 中世・近世 濱戸系』窯業2	愛知県
愛知県	2012	『愛知県史 別編 中世・近世 常滑系』窯業3	愛知県

第2章 経緯と経過



第1節 調査に至る経緯(図4-7)

桟敷貝塚は、愛知県大府市朝日町五丁目地内の台地の南縁に位置している。当時の現状は一部の宅地と雑木・竹林が生い茂っている状況だったが、かつては果樹園だったと聞く。貝塚であるとおり、現在は境川流域の河岸段丘の様相であるが、桟敷貝塚が形成される縄文晩期は海進による海岸沿いであった。桟敷貝塚を含めて、衣浦湾奥部は貝塚が多く形成されている。隣接する東浦町では、国史跡の入海貝塚や宮西貝塚、刈谷市では、本刈谷貝塚やハツ崎貝塚等多くの貝塚が形成され、愛知県屈指の遺跡密集地域である。

桟敷貝塚は、大正14年道路工事によって発見されたが、滅失したと見られていた。昭和37年に住友重機の社員寮建築の際に教員である谷沢 靖によって再発見され、条痕文土器の遺物が採集されている。昭和56年には大府市誌編纂のための悉皆調査で住宅地内の畠地に散布されていることが再確認された。現在まで採集された遺物は大府市歴史民俗資料館で常設展示されている。



写真1 桟敷貝塚調査前 東から

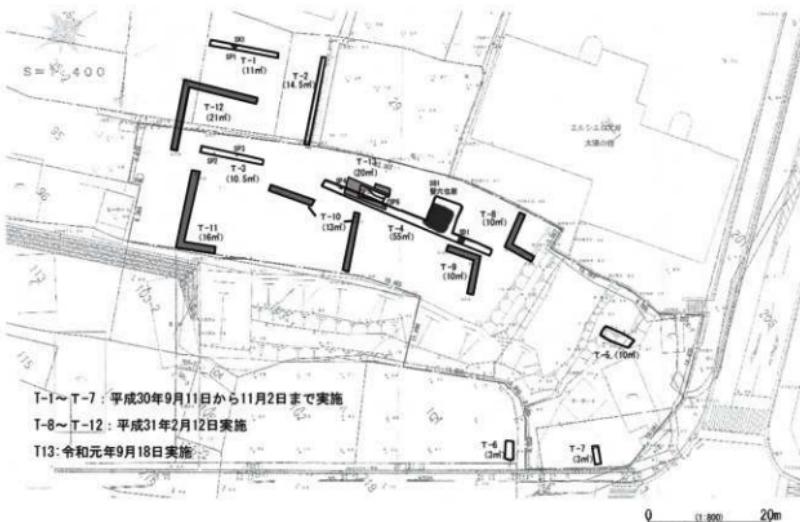


図4 確認調査・再確認調査トレーンチ配置図

平成30年、包蔵地一帯3.485m²を開発し宅地造成する事業が計画され、同年4月26日、事業者から埋蔵文化財の有無に関する照会文書が大府市教育委員会（以下、市教委）へ提出された。

当該遺跡の範囲はこの計画区域内に所在したため、平成30年6月27日、事業者から確認調査の依頼書と地権者の確認調査実施承諾書が提出された。市教委は既設建物の撤去と雑木の伐採を待って、平成30年9月11日に確認調査を行った。7箇所（T-1～T-7）のトレンチを設定して、掘削したところ、3箇所のトレンチから竪穴住居・溝・柱穴と思われる遺構が確認された。



写真2 桟敷貝塚確認調査 T-4 南から



図5 桟敷貝塚確認調査土柱図 T-1～T-7

この結果を受け、平成30年12月12日に事業者と市教委の二者で事前協議を実施した。協議で事業者から確認調査の再調査を要請された。それを受け、平成31年2月12日に再確認調査を実施した。

事業者立会のもと、5箇所（T-8～T-12）のトレンチを設定し、掘削したところ、表土と地山の混合土の堆積が確認され、遺構・遺物は検出されなかった。事業者はこの結果を受け、遺跡に極力影響しないよう設計変更に努めた。設計上、80m²の部分は保護できないことで本発掘調査が必要との合意に至った。

県文化財保護室と協議の上、県の民間導入指針に基づき、事業者から委託を受けた民間調査会社が調査主体として文化財保護法第92条に基づく本発掘調査を実施し、市教委はこれを管理指導することとなった。

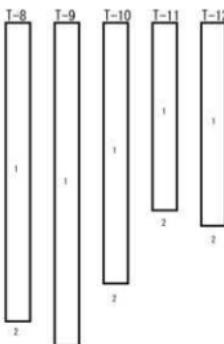


図6 桟敷貝塚確認調査土柱図 T-8～T-12

令和元年7月3日、事業者から文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出され、同年7月19日県から遺跡範囲部分については発掘調査を、その他の開発範囲については市教委による工事立会を実施するよう通知がされた。同年同月、民間調査会社であるナカシャクリエイティブ株式会社は事業者と本発掘調査に関する委託契約を締結し、これを市が管理監督する旨の協定書を事業者・調査会社・市教委の三者で締結した。

令和元年8月8日、ナカシャクリエイティブ株式会社が調査主体として文化財保護法第92条に基づく調査のための発掘届を提出し、県に受理された。その後、事業者から設計変更の申し出があり、令和元年8月28日、文化財保護法第93条に基づく発掘届が提出された。これを受け再度協議に入り、同年9月18日に事業者立会のもと現地対象地について緊急確認調査を実施し、トレンチを1箇所設定(T-13)して掘削した。結果として $13.2m^2$ が調査対象となり、合計 $93.2m^2$ を本発掘調査する合意に至った。これを受け、引き続きナカシャクリエイティブ株式会社が追加分について事業者と本発掘調査に関する委託契約を結び、市が管理監督する三者の協定書を重ねて締結した。

本発掘調査は、令和元年8月30日から10月5日までの間で実施された。調査の結果、弥生時代の竪穴住居2基と中世の溝1条、ピットが検出された。貝塚として認識されていたが、集落も範囲内にある成果となった。

出土品等の整理作業は、令和元年10月1日から令和2年3月1日にかけて行われた。出土品の洗浄・注記・遺物実測・デジタルトレース・図版作成を行い、報告書執筆は、令和元年12月17日から行い、令和2年3月31日に報告書を刊行した。

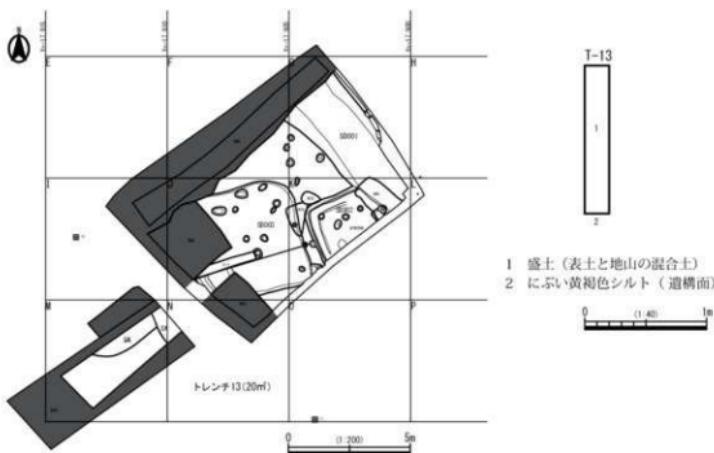


図7 栈敷貝塚トレンチ配置図・土柱図 T-13

第2節 調査の経過

大府市歴史民俗資料館が行った確認調査を基に設定された範囲の調査を行った。調査区は東西が長辺のほぼ長方形で、面積は 80m² である。

令和元年 9 月 2 日に資機材の搬入を行い、翌 3 日に重機（0.25t）を用いて、表土掘削を行った。その結果、調査区北端から西端にかけて 1m から 2m 程の幅で、搅乱により掘削を受けていることが判明した。現地表から 1.8m 程下げた面でもほぼ搅乱であったが、トレーナー南側でわずかに地山面が確認できたため、安全確保を考慮し、それ以上の掘り下げを止めることとした。また、トレーナー南壁において、遺物包含層や地山層の確認が出来たため、調査区全体をまず遺物包含層の高さまで下げた。その深度は現地表から 0.8m から 1m 程の深さであった。その後、人力で遺物包含層を取り除くと、ほぼ同じ面で溝状遺構（SD001）と隅丸方形の遺構（SB001・SB002）の範囲を検出した。検出写真撮影を行った後、SD001 の掘削を開始した。この遺構からは主に、山茶碗や古瀬戸、天目茶碗などの中世陶器片が出土しており、中には加工円盤とみられる遺物も確認できた。SD001 完掘後、SB001・SB002 にベルトを設定し、ベルトに沿ってトレーナー掘削を行い、それぞれの遺構の範囲確認を行った。SB001 は遺構床面の周囲がテラス状になっており、周溝も確認した。SB002 は床面が SB001 より高く、遺構の残存があり良好ではない様相が覗えた。特に遺構の東側はその立ち上がりも不明瞭であった。但し、遺構内ピット（SP005）では床面の高さで黒曜石の剥片が出土している。それぞれの付随遺構の掘削を行い、9 月 19 日に監督員による完了検査を、20 日に UAV（Unmanned Aerial Vehicle）による空撮を行い、現地での発掘調査を完了した。その後、24 日に宅地造成に伴う調査区南東部 SB001 付近の重機掘削に際し、立会をおこない、遺物の回収を行った。

また、経緯で述べたとおり、調査区の西に確認できた遺跡残存地の追加調査を 10 月 3 日から行った。壁面を含むその大半が搅乱による掘削を受けていたが、調査区中央部にわずかに遺構が残存している様相が確認できた。遺構はピット・土坑であったが、SK003 は、その形状から竪穴住居である可能性も考えられる。追加調査では遺物はほとんど出土しなかった。5 日まで遺構掘削・測量作業を実施し、同 5 日に監督員による完了検査を行った後、資機材の搬出を行い現場業務が終了した。なお、追加分の完掘写真についてはフォトグラメトリー用ソフトである Agisoft 社「Metashape」を用いて、3DCG モデルより作成した。また、2ヶ所の完掘写真を Adobe 社「Photoshop」を用いて合成を行った。



写真3 調査前写真 東から



写真4 表土掘削 東から



写真5 遺構検出 東から



写真6 検出状況 南から



写真7 遺構掘削 南から



写真8 測量 南東から



写真9 トレンチ掘削 南から



写真10 空撮 (ドローン) 北から



写真11 空撮 北から



写真12 追加区検出状況 西から

第3章 遺構



第1節 概要（図8・9）

今回の発掘調査は長軸約10m、短軸約8mの長方形とその範囲の南西端から1.5m北西を端として約2m幅、長さ6.6mの2ヶ所で、合わせた調査面積は93.2m²となった。今調査において確認できた遺構は溝1条、竪穴住居2棟、土坑3基、ピット34基であった。

これらの遺構は、それぞれの出土遺物から溝は中世以降、竪穴住居2棟は古墳時代初頭と古代の造成と考えられる。SK001は出土遺物から古代以後の遺構とみられる。SK002はその確認状況からSB002に付随する遺構であると判断した。SK003は出土遺物も少ないとから断定はできないが、土師質土器片とみられる遺物がわずかに出土し、その他の遺物を含有していないことから、古墳時代の遺構の可能性が考えられる。前述したように、その形状から竪穴住居の可能性も考えられる。SB001は地床炉（SL001）を伴い、その埋土から被熟土ブロックが多く含んでいる様相が窺えた。ピットについては竪穴住居の柱穴になると思われるものから中世の遺物を含むものまで確認できた。一方で確実に柵列になる遺構は確認できなかった。

第2節 遺構（図10・13、表2）

SB001

調査区東側南端に位置している。その南半分は調査区外へと続き、また、東はSD001による掘削を受けていることから、正確な法量は不明である。調査区内において確認した残存長は東西方向で約2.72m、南北方向で2.52m、遺構の深さは0.37m、主軸方向はN-20°-Wであった。遺構内ピットとしてSP013～SP018が確認できた。残存している北西肩部の形状や、SP014とSP017が主柱穴とみられること、また、前述したように遺構範囲南西でSL001を確認したことから隅丸方形の竪穴住居であると判断した。残存している範囲で周溝がみられたが、貯蔵穴は確認できなかった。この遺構の特徴として、床面がテラス状になっていることがあげられる。確認した範囲では竪穴住居床面端から20～30cm程内側の位置で、床面が4～5cm程、一段低く掘り込まれている様相が確認できた。南壁断面の様相からこの堀込部の埋土はほぼテラスの高さで埋め戻されていることが分かり、SP017はその後に埋没したことが窺える。出土遺物は土師質土器であった。



写真13 完掘1 北西上



写真14 完掘2 北西上

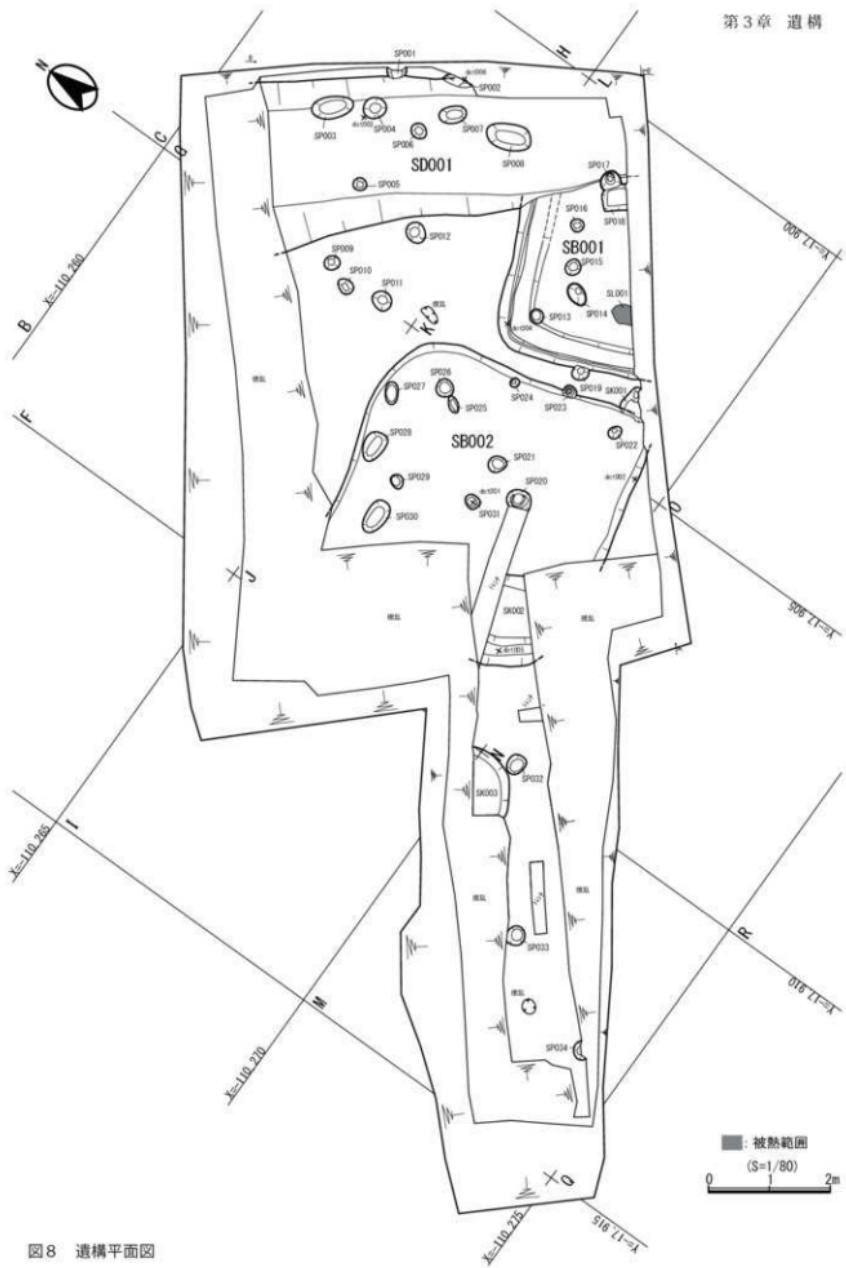


図8 遺構平面図

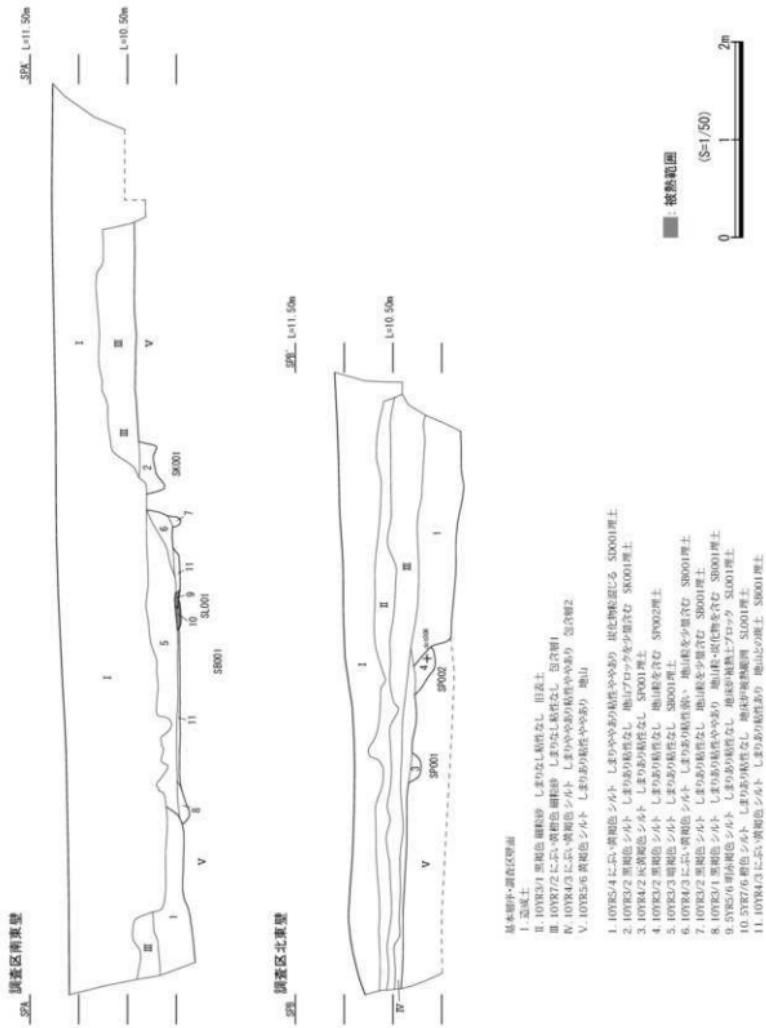


図9 壁断面図

SB002

調査区のほぼ中央に位置し、南北はほぼ調査区内で確認できた。一方西側は造成による掘削を受けており、ほぼ滅失していたが、僅かに南西部で残存が確認できた。やや不明瞭ながら隅丸方形の竪穴住居である。長軸4.67m、短軸4.51m、深度は最も差があるところで0.08m、その他の遺構内外の高低差は1cmから5cm程であった。主軸方向は、N-13°-Wである。遺構内ピットとしてSP020～SP031が確認できた。但し、断面の堆積状況からSP023はSB002埋没後の遺構と考えられる。残存している範囲の大半で周溝は確認できなかったが、僅かに西残存部で周溝とみられる溝状の掘り込みと、それよりも先に埋土が堆積した掘り方であるSK002を確認している。出土遺物は土師質土器片・黒曜石剝片・製塙土器脚部である。SK002からは縄文晩期の条痕文土器片も出土している。製塙土器が南壁立ち上がりで出土したため、古代の遺構と判断した。竈や被熟土・炭化物、貯蔵穴などは確認できなかった。

SD001

調査区東端に所在し、南北に延びている。調査区南壁東端でも確認でき、調査区外南へと続いている様相が窺える。また、調査区内において遺構の北端は確認できておらず、更に北壁が搅乱による掘削を受けているため、南側同様北側にも延びていたことは確認できていない。調査区内で確認した範囲での長軸は5.83m、短軸は2.81m、深さは0.53mであった。主軸方向はN-41°-Wである。遺構底部でSP003～SP008を確認した。出土遺物は主に、山茶碗・古瀬戸・天目茶碗・擂鉢などの破片で中世の所産である。加工円盤とみられる遺物も出土している。また、わずかであるが、灰釉陶器片や綠釉陶器片も確認している。

SK001

調査区南端中央付近、SB001とSB002の間、SB001を切るように掘削されている。南部は調査区外へと延びているため、正確な形状は不明であるが、確認できた範囲ではやや方形の土坑である。残存している範囲での長軸は0.57m、短軸は0.32m、深さは0.26mである。出土遺物は灰釉陶器片など古代の所産である。

SK003

追加で行った調査範囲の北東部で確認した。造成を伴う掘削を受けており、遺構の南東部のみ残存していた。調査区内での長軸は1.13m、短軸は0.51m、深さは0.19mである。確認した範囲での底部は平坦であった。遺物はわずかに土師質土器片が出土した。

その他

今回の調査では、上記の遺構のほかにピットを10基程確認した。SP001とSP002は調査区北東部端に所在し、一部をSD001による掘削を受けている。SP009からSP012は調査区の中央部、SD001とSB002の間にそれぞれ所在している。SP019はSB001の西に隣接しており、そのすぐ隣にはSP023がSB002と切り合うように所在している。SP032からSP034は追加調査区にそれぞれ所在している。これらの多くは遺物を含まなかつたが、一部ピットでは土師質土器片や須恵器片、灰釉陶器片などが出土した。なかでもSP002からはミニチュア土器が出土している。

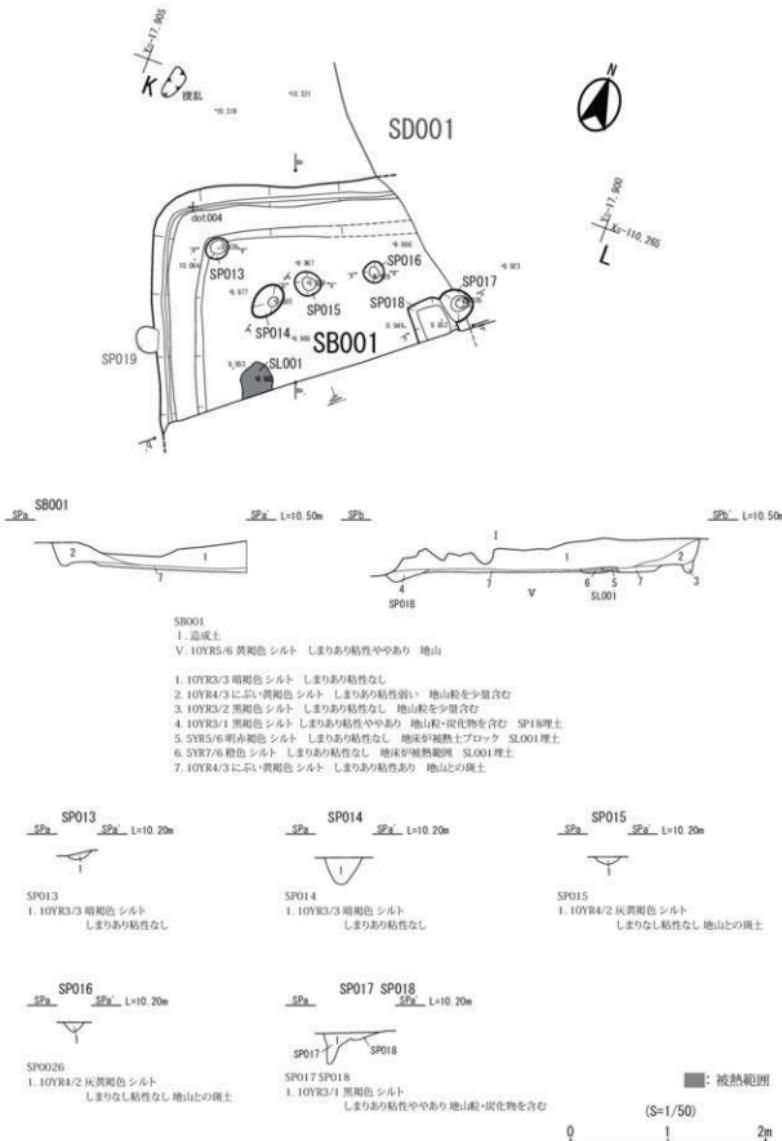


図10 SB001平面面図

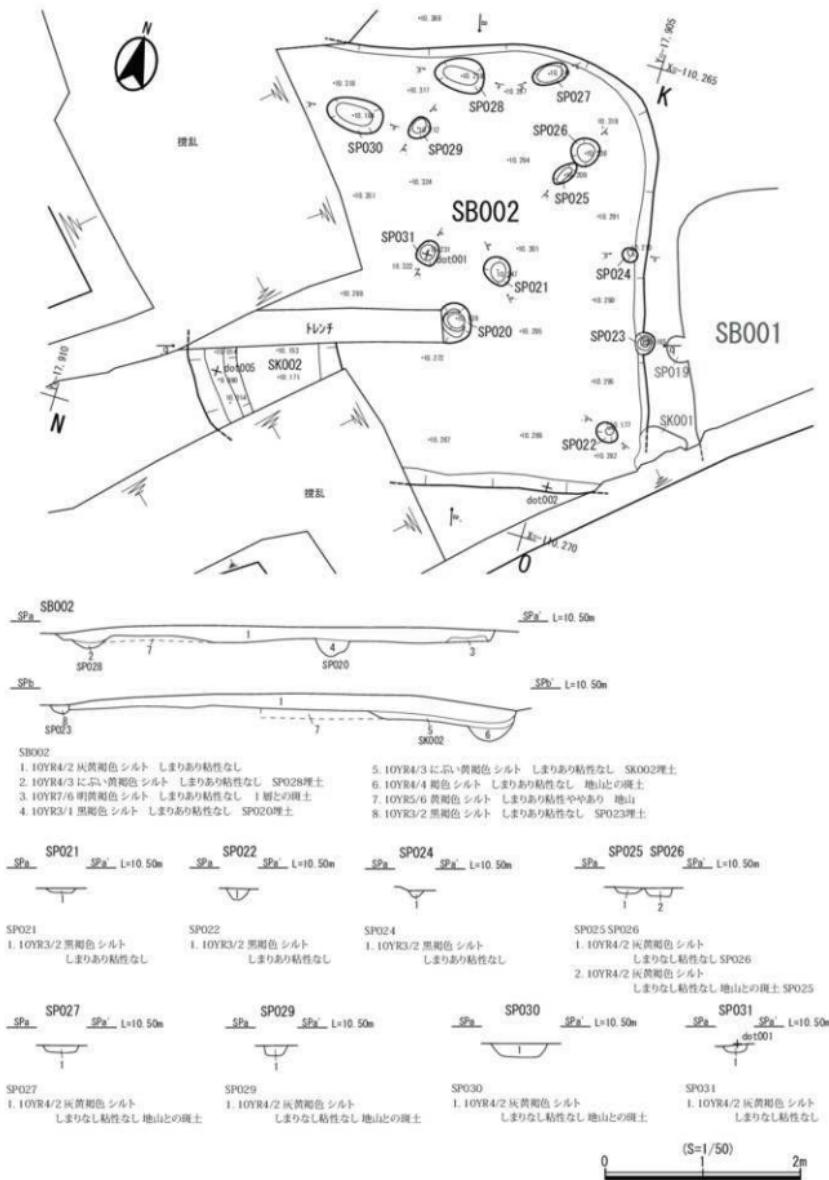


図11 SB002平断面図

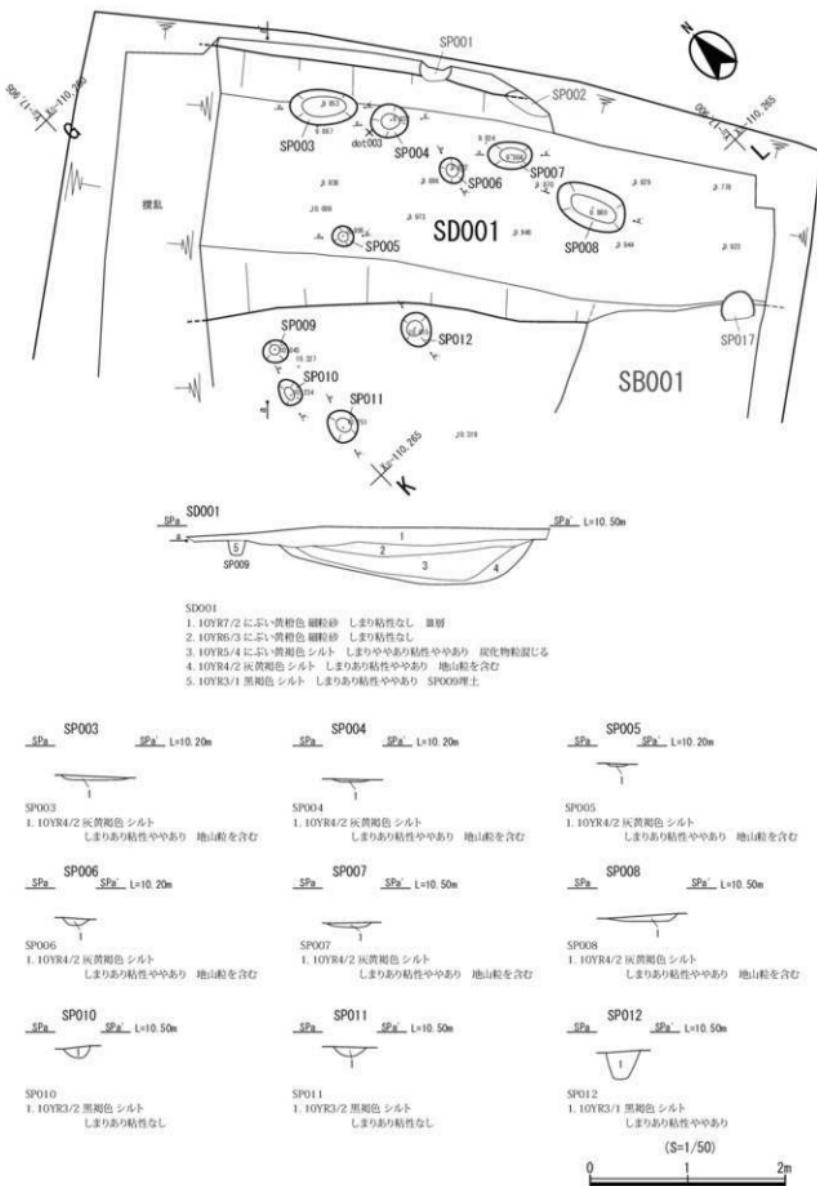
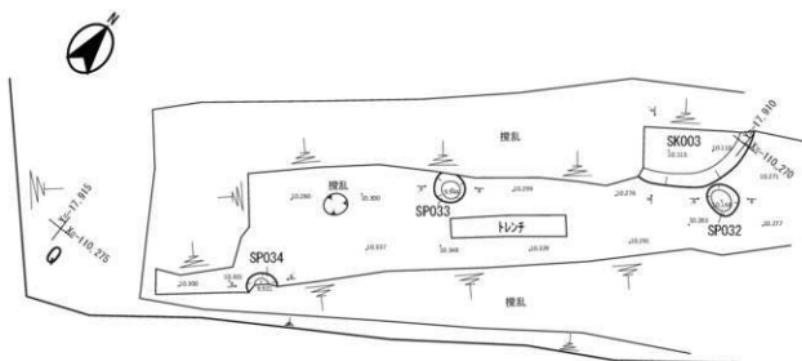


図12 SD001 平断面図



SP032 SP'a' L=10.50m

 SP032
 1. 10YR4/2 灰青褐色 シルト
 しまりなし粘性なし 地山粘を含む

SP033 SP'a' L=10.50m

 SP033
 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト
 しまりあり粘性なし

SP034 SP'a' L=10.50m

 SP034
 1. 10YR4/4 黄色 シルト
 しまりなし粘性なし

SK003 SP'a' L=10.50m

 SK003
 1. 10YR3/3 喀褐色 シルト
 しまりあり粘性あり 地山粘を少含む

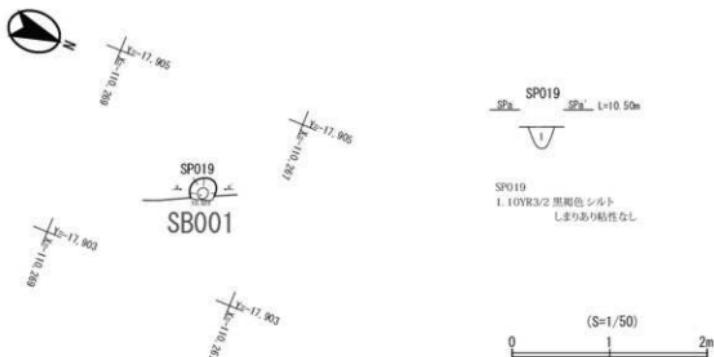


図13 その他遺構平断面図

第3章 道構

表2 道構観察表

S B

道構番号	グリッド	平面形	法量(m)			土色	土質	備考
			長径	短径	深さ			
SB001	K	隅丸方形か	(2.72)	(2.52)	0.37	-	-	-
SB002	J・K	隅丸方形	4.67	4.51	0.08	-	-	-

S D

道構番号	グリッド	断面形	法量(m)			土色	土質	備考
			長径	短径	深さ			
SD001	F・G・K	逆台形	(5.83)	2.81	0.53	-	-	-

S L

道構番号	グリッド	平面形	法量(m)			土色	土質	備考
			長径	短径	深さ			
SL001	K	不定形	(0.33)	0.32	0.06	5YR7/6 橙色	シルト しまりあり 粘性なし	地床が被熱範囲。SB001 内道構。

S K

道構番号	グリッド	平面形	法量(m)			土色	土質	備考
			長径	短径	深さ			
SK001	K	方形か	0.57	(0.32)	0.26	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 を切る。
SK002	J	楕円形	1.52	(0.87)	0.18	10YR3/3 暗褐色	シルト しまりあり 粘性あり	地山粒を少量含む。SB002 内道構。
SK003	I・M・N	隅丸方形か	(1.13)	(0.51)	0.19	10YR3/2 黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	

S P

道構番号	グリッド	平面形	法量(m)			土色	土質	備考
			長径	短径	深さ			
SP001	G	楕円形か	0.32	(0.15)	0.13	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SD001 に切られる。
SP002	G	楕円形か	(0.50)	(0.09)	0.22	10YR3/2 黑褐色	シルト しまりあり 粘性なし	地山粒を含む。SD001 に切られる。
SP003	G	楕円形	0.69	0.36	0.01	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP004	G	円形	0.37	0.35	0.03	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP005	G	円形	0.22	0.21	0.03	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP006	G	楕円形	0.27	0.24	0.07	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP007	G	楕円形	0.45	0.28	0.04	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP008	G	楕円形	0.73	0.43	0.08	10YR4/2 灰黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒を含む。SD001 内道構。
SP009	G	円形	0.26	0.23	0.28	10YR3/1 黑褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	
SP010	F・G	楕円形	0.28	0.22	0.13	10YR3/2 黑褐色	シルト しまりあり 粘性なし	

表2 遺構観察表

S P

遺構番号	グリッド	平面形	法量(m)			土色		土質	備考
			長径	短径	深さ				
SP011	G	楕円形	0.33	0.29	0.09	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	
SP012	G	楕円形	0.35	0.30	0.29	10YR3/1	黒褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	
SP013	K	円形	0.24	0.21	0.09	10YR3/3	暗褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB001 内遺構。
SP014	K	楕円形	0.39	0.25	0.26	10YR3/3	暗褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB001 内遺構。
SP015	K	円形	0.28	0.25	0.08	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB001 内遺構。
SP016	K	円形	0.22	0.21	0.10	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB001 内遺構。
SP017	K	円形	0.33 (0.28)	0.32	10YR3/1	黒褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒・炭化物を含む。SB001 内遺構・ P018 に切られる。	
SP018	K	方形か	0.43 (0.41)	0.10	10YR3/1	黒褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	地山粒・炭化物を含む。SB001 内遺構・ SP017 を切る。	
SP019	K	円形	0.30	0.26	0.23	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB001 を切る。
SP020	J	円形か	0.40 (0.29)	0.16	10YR3/1	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 内遺構。	
SP021	J	楕円形	0.31	0.26	0.04	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 内遺構。
SP022	K	楕円形	0.24	0.19	0.12	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 内遺構。
SP023	K	円形	0.23	0.20	0.09	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 を切る。
SP024	K	円形	0.16	0.15	0.11	10YR3/2	黒褐色	シルト しまりあり 粘性なし	SB002 内遺構。
SP025	J	楕円形	0.29	0.15	0.08	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB002 内遺構。
SP026	J	円形	0.30	0.28	0.06	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	SB002 内遺構。
SP027	J	楕円形	0.37	0.21	0.09	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB002 内遺構。
SP028	J	楕円形	0.51	0.35	0.08	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト しまりあり 粘性ややあり	SB002 内遺構。
SP029	J	楕円形	0.24	0.20	0.11	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB002 内遺構。
SP030	J	楕円形	0.58	0.34	0.14	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山との斑上。SB002 内遺構。
SP031	J	楕円形	0.25	0.22	0.08	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	SB002 内遺構。
SP032	N	楕円形	0.34	0.29	0.14	10YR4/2	灰黄褐色	シルト しまりなし 粘性なし	地山粒を含む。
SP033	M	円形	0.33 (0.30)	0.37	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト しまりあり 粘性なし		
SP034	M	円形か	0.32 (0.12)	0.41	10YR4/4	褐色	シルト しまりなし 粘性なし		



写真15 SB001断面 西から



写真16 SB001断面 北から



写真17 SL001断面 北から



写真18 SB001下層断面 東から



写真19 SB001完掘 北上



写真20 SB002断面 北から 1



写真21 SB002断面 北から 2



写真22 SB002断面 西から 1



写真23 SB002断面 西から 2



写真24 SB002完掘 北上



写真25 SP031出土遺物

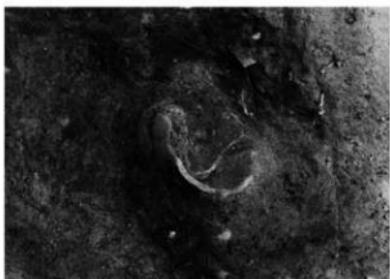


写真26 SP002出土遺物



写真27 SD001断面 南東から

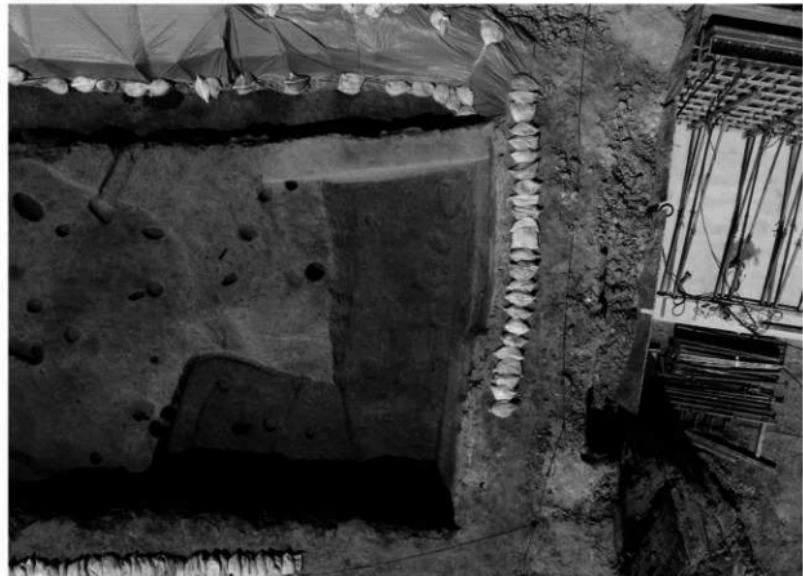


写真28 SD001完掘 北西上

第4章 遺物



第1節 概要

今回の発掘調査では、27ヶ月テンバコで2箱の遺物が出土し、その中から20点の図化を行った。SB001からは甕や壺などが、SB002からは黒曜石剥片や製塙土器脚部・土鉢など出土した。更に、ピットからも様々な時代の土器が出土している。第3章でも記した様にSP002からはミニチュア土器が出土している。また、その他の遺構では縄文時代晩期に比定される条痕文土器片や、須恵器・灰釉陶器や緑釉陶器といった古代の遺物の小片等も出土している。SD001からは、主に山茶碗や古瀬戸、大窯期の所産とみられる土器片が出土した。但し、これらの大半は小破片であり、実測や年代の決め手に欠けるものである。また、それらの中に山茶碗や天目茶碗の底部を二次利用した加工円盤がみられ、特に天目茶碗の加工円盤はSD001の底部で確認した。表土や遺物包含層からも土師質土器を中心に、様々な時代の遺物が出土しており、更に、表探では棧敷貝塚の由来となった貝も多数確認された。

第2節 遺物（図14-15、表3）

SB001

この遺構では、土師質土器が出土している。図示したものでは、底部をのぞく口縁から胴部にかけて復元できた甕（001）が遺構西端から出土している。欠山期に比定され、更に口縁内外の横ナデ調整といった特徴がみられることから古墳初期の所産とみられる。もう一点の甕の口縁部（002）も調整から同時期の所産とみられる。その他、焼成前に底部穿孔を施された甕の底部（003）、台付甕台部（004）、凹線文が内側に施された高环の口縁部（005）などがある。更にSP017からはミガキが施され赤彩された壺底部（006）が出土している。この土器は003の土器と異なり、焼成後に底部を穿孔されている。

SB002

この遺構では、主に土師質土器が出土している。前述したように、黒曜石の両極剥片（007）がSB002床面のSP031直上で出土した。その周囲の埋土からは更に細かい剥片を2点採取している。その他に、製塙土器の脚部（008・009）、土鉢（010）が出土している。製塙土器は形状から7世紀の所産と思われる。また遺構内のSK002から条痕文土器（011）口縁部も出土している。011は縄文時代晩期の所産とみられる。また、図示していないが、遺構西ベルト一括資料に緑釉陶器片を確認している。

SD001

この遺構からは、縄文時代から中世に至る遺物が出土している。その中心は中世陶器で、山茶碗片や古瀬戸、天目茶碗や擂鉢など大窯期の遺物が出土している。前述したように、そのほとんどが小破片であり、口縁から高台まで残存しているものが無いため、明確な時期は不明である。012は山茶碗を二次利用した加工円盤である。山茶碗の形式は4形式に相当するとみられる。013は天目茶碗の底部を二次利用した加工円盤で、底部の形状から大窯期第3段階に比定される。014は擂鉢の底部である。口縁部が欠損しているため正確に判別できないが、大窯期初期の所産である。また、この遺構に

関連する遺物ではないが、底部に葉脈痕のある土師質土器の壺（015）や灰釉陶器の碗（016）も出土している。016は高台の形状などから、時期はK90からO53に比定される。

その他

堅穴住居や溝と共に伴わない土坑やピットからは、少量ながら様々な時代の遺物が出土している。SP001からは土師質土器・山茶碗、SP002からは土師質土器・須恵器、SP009では土師質土器・須恵器・山茶碗、SP010からは土師質土器、SP019からは山茶碗が、SP033からは土師質土器・灰釉陶器・山茶碗が出土している。その大半が小破片であり、図化や編年推定に堪えないものであった。唯一、SP002から出土した土師質土器のミニチュア土器（017）の図示を行った。時期は欠山期と比定される。この遺構は遺構掘削の段階で壁面の逆から搅拌を受けた形跡があり、図示した遺物以外にも礫や条痕文土器片・須恵器环蓋片、更にはスレート片などが含まれていた。また、表採や検出では、条痕文土器から現代物まで様々な遺物を確認しており、その一部を図示した。018は製塙土器の脚部、019は土師質土器底部である。また、名古屋市の水道止水栓（020）も図化を行った。その他、表採した貝はハイガイが多く、その他、カキやシジミがわずかに確認できた。

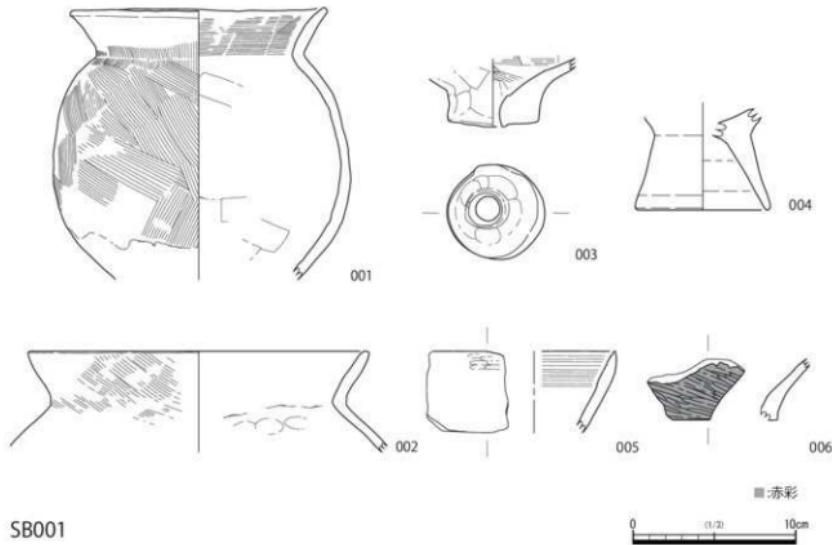


図14 遺物実測図

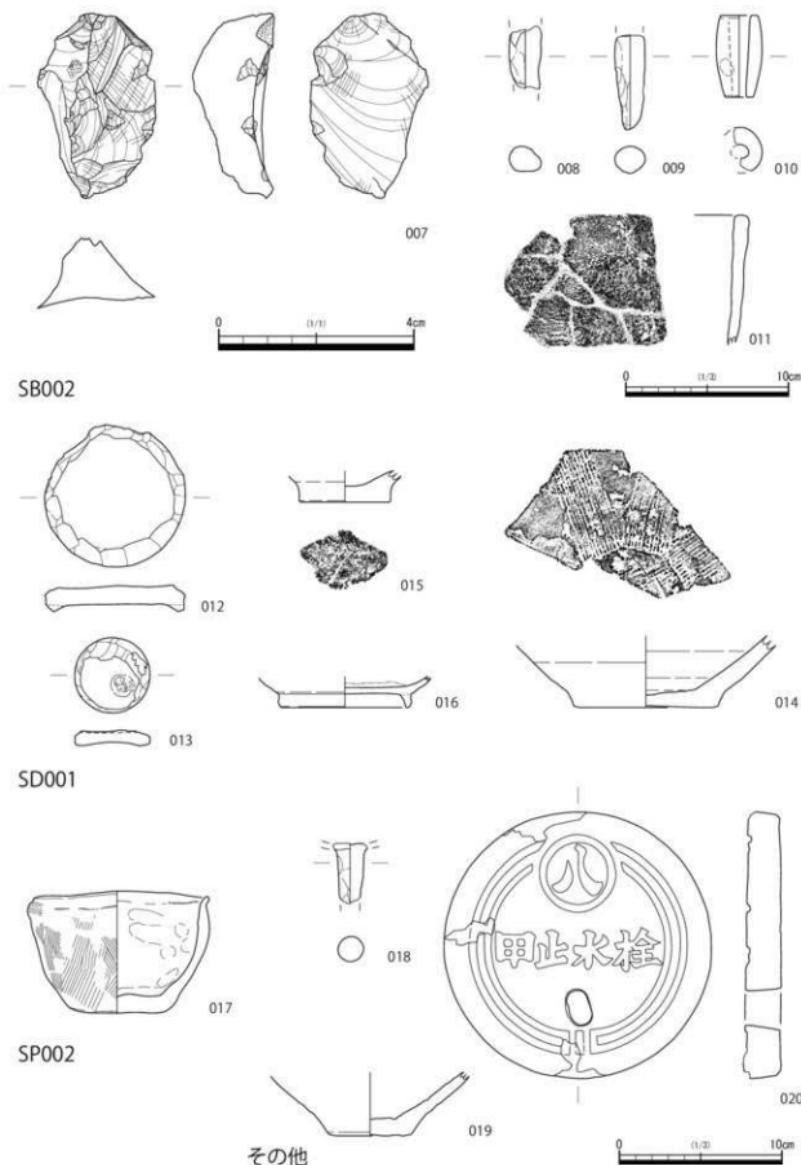


図15 遺物実測図

表3 遺物観察表

図版番号	種別 / 器種	出土地区	遺構	取上番号	法量(cm)			法量(cm)			胎土(色調)	焼成	備考
					口径	器高	底径	最大長	最大幅	最大厚			
001	土師質土器 / 台付蓋か	立食	SB001	-	15.4	(16.7)	-	-	-	-	7.5YR7/6	やや良好	ハケ・板ナデ・ヨコナデ
002	土師質土器 / 蓋	T-4 (SB001)	-	21.0	(5.8)	-	-	-	-	-	10YR7/6	良好	ハケ・摩滅激しい
003	土師質土器 / 穴孔土器	K	SB001	-	-	(4.2)	5.5	-	-	-	5YR5/8	良好	ハケ・板ナデ・ユビナデ・底部焼成前穿孔
004	土師質土器 / 台付盤	K	SB001	-	-	(6.2)	8.0	-	-	-	5YR6/6	良好	摩滅激しい・白包粒多く含む
005	土師質土器 / 高环	K	SB001	-	-	(5.0)	-	-	-	-	10YR7/6	やや良好	円文線・ミガキ・摩滅激しい
006	土師質土器 / 蓋	K	SP017	-	-	(3.1)	-	-	-	-	2.5YR6/8	良好	SB001内・外面赤彩・ミガキ・ユビナデ・焼成後底部穿孔
007	黒曜石 / 剥片	J	SP031	001	-	-	-	3.8	2.4	1.4	-	-	SB002内・重量 9.1g
008	土師質土器 / 製塙土器	J	SB002	-	-	-	-	(3.8)	2.0	1.6	2.5YR7/4	良好	手捏ね・ユビオサエ
009	土師質土器 / 製塙土器	J	SB002	002	-	-	-	(5.8)	1.8	1.7	10YR8/3	良好	手捏ね・ユビオサエ
010	土師質土器 / 土鍤	J	SB002	-	-	-	-	5.0	2.8	(2.7)	10YR8/4	良好	ユビナデ
011	礎文土器 / 深鉢か	J	SB002	005	-	(8.0)	-	-	-	-	7.5YR7/3	やや良好	外面無文・内面条痕文
012	山茶碗 / 碗	G	SD001	-	-	-	-	8.7	8.7	1.4	2.5Y8/1	良好	加工円盤・底部回転条切
013	陶器 / 天目茶碗	G	SD001	003	-	-	-	4.6	4.6	1.4	5YR5/6	良好	加工円盤・底部削り出し
014	陶器 / 揖詰	G	SD001	-	-	(4.4)	(8.0)	-	-	-	2.5YR8/4	良好	揖詰 13 条・錯軸
015	土師質土器 / 蓋	G	SD001	-	-	(1.9)	5.4	-	-	-	7.5YR8/6	良好	底部集疵痕
016	灰釉陶器 / 碗	G	SD001	-	-	(6.8)	7.6	-	-	-	2.5Y7/1	良好	回転ロクロナデ・回転ヘラケズリ
017	土師質土器 / ミニチュア土器	G	SP002	006	11.3	7.6	6.0	-	-	-	2.5YR7/4	やや不良	手捏ね・ユビオサエ・ユビナデ・ハケナデ
018	土師質土器 / 製塙土器	追加区	-	-	-	-	-	(3.7)	2.1	1.6	10YR6/6	良好	手捏ね・ユビナデ
019	土師質土器 / 蓋	F・G・J・K	検出面	-	-	(3.9)	5.0	-	-	-	7.5YR8/3	やや良好	摩滅激しい
020	止水栓 / 蓋	-	表土	-	-	-	-	16.4	16.4	2.3	5Y8/2	-	

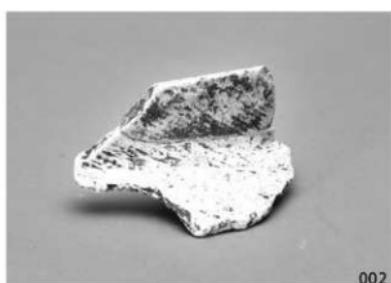
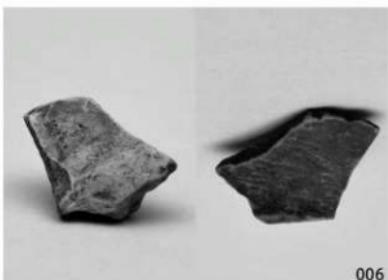


写真29 遺物写真



006



007



008



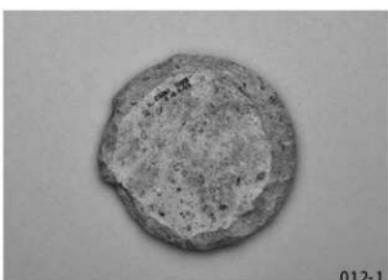
009



010



011

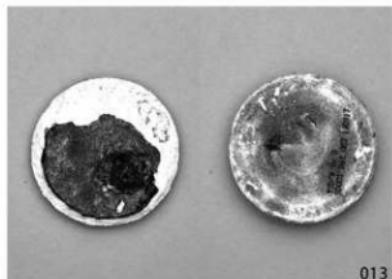


012-1

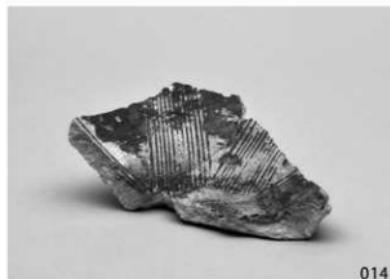


012-2

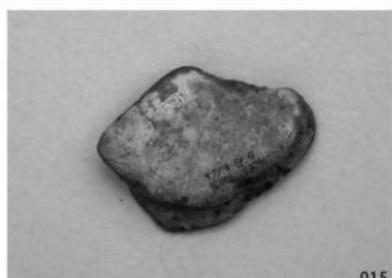
写真30 遺物写真



013



014



015



016



017



018



019



020

写真31 遺物写真

第5章 まとめ



今回の調査範囲は、その結果から調査区の北側をはじめとして広い範囲で後世の掘削による攪拌を受けていることが判明した。遺構もその影響を受けており、遺構範囲の一部や堆積状況などの判別が困難となっていた。特にSB002はその西側の殆どが攪拌を受けており、同時に確認したSK002やその上層の周溝とした掘り込みなど、その範囲など明確に判別することが困難であった。SB001についてもテラス状に彫り込まれた形状が竪穴住居1棟のものであるのか、別々に建てられた2棟が重なりあっていた結果によるものなのか、判別するには至らなかった。

そのような状況の中、今回の発掘調査では、以下の点が成果として挙げられる。1つは欠山式の土器を伴う竪穴住居が確認されたことである。棧敷貝塚は、出土遺物が貝類をはじめ、条痕文土器や櫻王式に属する壺形土器などであることから、縄文時代晚期の貝塚であると認知されており、今回も少量ではあるが貝と土器片を採取した。しかし、試掘や本調査の結果、SB001内から欠山式期の土師質土器が出土し、甕口縁部の調整から古墳初期の所産と想定された。また、その西側で確認したSB002に関しては、掘削深度は深くないものの、製塙土器の脚部や黒曜石の剝片などが出土している。前述した通り、この遺構は大きく攪拌を受けており、甕や被熱範囲、貯蔵穴なども見られず、遺構の時期を明確にすることは困難であるが、製塙土器脚部の形状から古代の遺構である可能性が強い。この時期の遺物としてSD001やピットから、灰釉陶器や緑釉陶器の破片が出土している。大府市市内では、同時期の遺構や遺物として、子安神社遺跡では溝状遺構やピット群で寄道式期や欠山式期といった、弥生時代後期中葉から後葉の遺物が出土しており、惣作遺跡からは複合遺跡にふさわしく、獅子懸式・長床式期の所産とされる弥生時代中期の土器から、製塙土器をはじめ土師器・須恵器といった古墳時代から古代の土器、山茶碗・古瀬戸・内耳鍋の様な中世陶器など、様々な時代の遺物が出土している。今回の調査結果では、棧敷貝塚は弥生時代の中期を除き、惣作遺跡と同時期の遺物が確認できている。遺物の出土量は惣作遺跡が多いものの、棧敷貝塚では竪穴住居が確認されたことから、この地に人々が定住していたことがうかがえる。共に大規模な発掘調査を行っていないため、明確には言えないが、この2つの遺跡は同時期に、その距離から互いに影響を与えたながら存在した可能性が考えられる。今後調査が行われる際には、この2つの遺跡の関係性についても注目したい。また、惣作遺跡で出土が確認されていない弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が、子安神社遺跡と共に確認されている。遺跡の位置的に大府市のそれぞれ北端と南端に位置しており、その関係性も注目される。

更に、以前から確認されていた条痕文土器について、前述したように今回も破片を採取することはできたが、土師器を含有する遺構から出土するなど、そのどれもが一次埋没ではないと考えられる。この土器は縄文時代晚期に相当すると思われ、惣作遺跡でも確認されていない。一方で、棧敷貝塚の南には縄文時代早期後半の土器を包含している東浦町の入海貝塚が所在しており、また、逢妻川の対岸にある刈谷市内では縄文時代早期から晚期にかけて、遺跡が川沿いに多数存在し、集落・貝塚・土壙墓などが確認されている。これらの遺跡と棧敷貝塚は、無関係であったとは考えがたく、今後の調査でこの時期の遺構、若しくは、遺跡名となっている貝塚が確認されることにより、周囲の縄文時代の遺跡との関連が判明し、当時の人々の生活の在り方を解き明かす一助となると思われる。更に、刈谷市は弥生時代に入ると遺跡が希薄になり、弥生時代の竪穴住居跡が確認できる遺跡は中期のものと

みられる階棚遺跡と棧敷貝塚の竪穴住居跡から出土した遺物と同時期の欠山式期や土師器が出土した芋川遺跡のみである。これらは、縄文時代から弥生時代への転換期に大規模な人々の動きがあったことを想定させ、今回、棧敷貝塚からその時期の住居跡が確認できたことは、その動きが逢妻川対岸のこの周辺にも及んでいたことを想像させるものである。

もう1つの成果は、SD001を確認したことである。この遺構自体は調査区を南北に縦断しており、遺構の規模など不明な点が多いが、この丘陵地は「第1章 第2節」の歴史的環境でも述べたように、室町時代になると古代から鎌倉時代末期まで続いた窯業活動が急速に衰えていることが確認されている。また、周囲の地域が室町時代末期の戦乱に伴い、多くの砦や城館が築かれていたのに対し、遺跡が希薄となるとされ、遺構が確認されていなかった。しかし、SD001からは山茶碗をはじめ、古瀬戸など中世陶器片が出土しており、その中でも、天目茶碗底部と擂鉢の底部片について、破片のみの確認であるため、明確に言えないが、共に16世紀半ばの所産とみられる。この時期、周辺では1533年に刈谷城が棧敷貝塚から2kmの位置に築城されており、1560年の桶狭間の戦いの際に落城している。棧敷貝塚は桶狭間と刈谷城の間に位置し、SD001が16世紀半ばに築かれたものであるとすると、当時の情勢の影響をうけて築かれた可能性も考えられる。

このように、棧敷貝塚は周辺の遺跡が営まれていた、それぞれの時代を包括的に考える際に、重要な位置にあったことが想定でき、そのような知見をもたらした今回の調査は非常に有意義であったと考えられる。今後の棧敷貝塚の調査の進展により棧敷貝塚のみならず、周辺遺跡を含めた時代ごとの詳細が明らかにされていくことが期待される。

報告書抄録

棧敷貝塚

—宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

発行日 2020年3月31日

監修 大府市教育委員会

〒474-8701 愛知県大府市中央町五丁目70番地
Tel: 0562-46-3332

大府市歴史民俗資料館

〒474-0026 愛知県大府市梅山町五丁目180番地の1
Tel: 0562-48-1809

発行・編集 ナカシャクリエイティブ株式会社

〒468-8533 愛知県名古屋市天白区野並二丁目213番地
Tel: 052-895-1131

印刷 三星商事印刷株式会社